

正しい真似の仕方

片岡達治



日本人は世代間の差はありますが、戦後から今に至るまで一貫して関心が高い外国はアメリカ合衆国（以下、米国）です。奇妙なことは、敵国であったにもかかわらず敗戦後間もなくから米国を好意的に受入れていたことです。経済援助を受けていましたから、その限りであるならば理解できますが、それを越えて好意的であったように思います。新聞等のメディアの外国記事は極端に米国に片寄っていました。勿論、国として政策、基本方針が米国追随であることがその理由にあげられるわけですが、文化面でも好意的であることには何か別の民族的要素があるようにも思えます。

日本は米国の真似をずい分してきました。私は1970年～1973年に留学して米国で暮らしていましたが、スーパーのチェーン店がすでに沢山できていて、百貨店の衰退が始まっていました。使い捨て文化の中であって、週末のピクニックにはプラスチック製品のゴミの山が積みものでした。市民の財布には何枚もクレジットカードが納まっていましたが、他方でカード破産する人々も出ていたので警告記事が新聞に載っていました。安価なマクドナルドハンバーガーがテレビでくり返し宣伝され、子供には大人気でドライブインは家族連れでにぎわっていました。

気がつくと、今の日本にはとても似た状況がみられます。さらにさまざまな分野で米国を追随しています。私は基礎医学研究が専門ですが、大学院卒業後に米国留学して英語で論文発表し、その後留学先の研究材料を日本に持ち帰って研究を継続することで、その分野の日本でのリーダーの地位を獲得、それを手がかりにして助教授、教授へと昇進するのが一つのパターンでした。最近もアルツハイマー関連遺伝子を米国留学先から持ち出して理化学研究所に就職していた日本人研究者が留学先の研究所から訴訟を起こされていますが、30年前と基本的には同じ構図で米国追随が継続していることがわかります。

米国の豊かな生活、進んだ学術研究は日本の目標になっていたわけで、それを受入れる、あるいは真

似ることは必要でした。しかしそこに含まれる問題点も米国においては明らかになっているわけで、当然そこに配慮が求められるのですが、どうもその点が欠落しているようです。狭い国土で使い捨て文化をすすめたらどうなるか、明々白々のことです。

クレジットカードでの自己破産の対策を十分に準備しないでカード文化を輸入して犠牲者を出しています。日本の百貨店経営者はこの30年間、米国視察をして何を見ていたのでしょうか？カタログ販売は真似したけれどももっと根本的な重大問題、米国での百貨店の長期衰退の中に現在の自分達の姿を見なかったのでしょうか？

医学研究の分野では遺伝子の研究が最も先端的な研究となっていますが、がん患者での遺伝子治療の試みは米国ではほぼ全部失敗してもう一度基礎的なところに立ち戻ってやり直しの段階に入っています。しかし日本ではこれからはがん患者での治療の試みがニュースとして報じられるはずですが、国の研究予算がついていないことと医学研究者の研究欲 個人的な欲 がこれを支えます。一周遅れで米国を追っているようなものです。

ここに指摘した例でみられることは、多面的な価値判断を欠いたまま真似していることです。日本人は昔から外来のものを輸入し、上手に同化してきたと評価され、日本文化の特徴の一つと教えられてきました。しかしそれはずい分と長い時間をかけた作業であったと思います。近年の時代の移り変わりの速度はとても速くて、阻しゃくする前に次のものを取込まざるを得ない状況にあります。その結果はさまざまな混乱を残して終る危険性があります。

日本人が創造的であればよいのですが、教育内容、社会環境ともにそうはなりにくい国ですから、米国追随を続けることとなります。しかし見方を変えれば、日本のために米国が試行錯誤をくり返してくれる、ともいえます。米国の経験を利用させていただくために、日本人は多面的な価値判断をする能力を養うことが肝要ではないかと思えます。

（癌研究会癌化学療法センタ - 主任研究員）